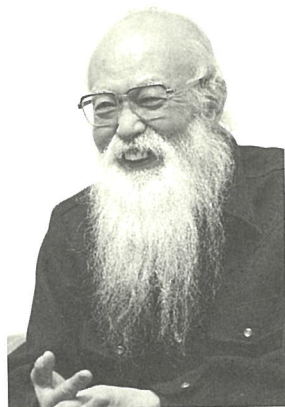


[人の心とともに歩む経済学を]



宇沢弘文

(大学社会的共通資本研究センター長)

今春大学に開設された「社会的共通資本研究センター」のセンター長となった宇沢弘文専任フェロー。学者として大きな功績をあげてこられた背景で、どのような人生を歩んでこられたのか。何が宇沢先生を現在の道に進ませたのか。その豊かなお人柄とともに、「社会的共通資本」という考え方に對する情熱をうかがいました。

■社会的共通資本研究センターの役割とは

「社会的共通資本」とは、一つの国、または特定の地域に住むすべての人が、豊かな経済的文化的生活を営み、そのような人間的に魅力のある社会を安定して維持することを可能にする社会的装置のことです。具体的にいうと、教育をはじめとする社会制度、自然環境、道路などの社会基盤がそうです。日本は戦後飛躍的な経済成長を遂げましたが、ひるがえって現代の日本社会の状況はどうでしょう。開発の名のもとに美しい自然が破壊され、貧しい都市環境のもと、私たちは心豊かな生活を営んでいると言えるでしょうか。そこに魂の自由はあるでしょうか。世界規模でも、地球温暖化問題が深刻です。人間不在の政治がまかり通る今こそ、この社会的共通資本という考え方が重要なのです。

今春から始まった社会的共通資本研究センターにおける活動を、私は「日本のルネッサンス」にしたいと考えています。ルネッサンスとは本来「人間回復」という意味。それは中世ヨーロッパにおいて、教会の圧政をはねのけて人間性を回復しよう

という動きでした。その観点から言えば、江戸時代の浮世絵も当時の社会的共通資本といえます。芸術を大衆のものとして、徳川幕府の王政下で庶民の精神を解放したのですから。

私の知人に桂離宮の修復などを手がけた宮大工さんがおられますが、彼自身、仕事を通じて日本の木造建築の良さを再認識したと言います。畳の生活、親子がお風呂に一緒にいる生活。日本建築が生み出す生活はたいへん豊かで美しく、自然環境にも適応しています。

現在、社会的共通資本研究センターは、同じ同志社大学の研究開発推進機構の一つである「竹の高度利用研究センター」とも連携して、日本建築を支えてきた大切な建築資材、再生産可能な天然資源である竹を利用した社会モデルの研究にも取り組んでいます。竹は広くアジアに分布して、昔から住居や家具の資材から食料、民話を生み出すものとして使われてきました。このように社会的共通資本とは、豊かな文化や人間性を支えているものにほかなりません。数字的な利潤を追求するだけの経済ではなく、人間が真に豊かで幸福になるための経済。それを当センターでさらに追究したいと考えています。

将来的には定期セミナーなどの形で、市民の皆さんとともに社会的共通資本について学びたいという希望もあります。今まで私たちは大学の中で研究したことを皆さんに向けて発表したり啓蒙したりしてきましたが、今度は逆に、皆さんが社会で生きている中で学んでこられたことなどを聞きし、これからの私たちの研究の方向づけに役立てたいというのが主な目的です。もっと積極的に大学の外へ出ていき、社会で培われたものを大学

に還元しようというわけです。これは八田大学長の考えでもありません。

豊かな人間性を養う大学から 明日を担う人材が育つ

このたび同志社大学に招かれましたが、私自身、以前からこの大学には好感を抱いていました。同志社は新島襄から受け継がれてきた、何事にも妥協しない高貴な精神を今も保っていると思います。明治という時代がもっていた、志の高さというべきものでしょうか。自由な雰囲気もいいですね。キリスト教主義の大学ではあっても、制圧するような厳しさがない。キャンパスを歩く女性もたいへん美しい。私はジョギングを続けているのですが、今出川キャンパスの向かいにある京都御苑も、自由に走れるのでとても気に入っています。京都御苑や京都御所に対して、市民が大きな愛着を抱いているのを感じますね。昔から京都の街の人たちには、天皇に対して特別な親しみがあつたのでしょうか。東京の皇居の中を走るなど、難しいでしょう。そんなことをしようとしたら警官が飛んできます。

そして、このような京都という街にあり、自由で高貴な校風をもつ同志社大学もまた、社会的共通資本と呼べるのです。大学は、立派な建物があり、そこへ至る立派な道路を造ればよいというものではありません。教員、学生ともに良い人材がいなければ何にもならない。私が学んだ東京府立第一中学校には、太平洋戦争突入間近という時代だったにもかかわらず、リベラ

ルな良い先生方が大勢おられました。一高時代も恵まれた環境の中で、私たち学生は友と大いに語り合い、哲学、文学、科学、芸術など、人類の知的遺産、リベラルアーツの吸収に熱中したものです。先生方も学生たちを、個の独立した存在として扱って下さいました。

十九世紀のアメリカの経済学者ソースティン・ウェブレンは、人間が本来もっている、何ものにもとられない好奇心や知識欲を発展させることが大学の大きな役割であると説いています。大学とはそのように豊かな人間を育てる、社会的共通資本としての場でなければなりません。多少貧しくとも、心豊かに生きていける人間を育てる場でなければ。そうでなければ、学生たちがかわいそうです。

また一高時代に出会ったゲーテの思想にも、私は大いに影響を受けたものです。ゲーテが宰相を務めた時、当時国王や貴族が独占していた芸術作品や学問、庭園などのアートを国民共有の財産として一般に開放したのですが、この思想は後年、私の社会的共通資本の考え方の参考となっています。

東大時代は数学科で学びましたが、私を経済学へ転身させる大きな転機になったのは、あるとき読んだ河上肇の『貧乏物語』です。この本の序文に引用されている、十九世紀イギリスの美術批評家・社会思想家であったジョン・ラスキンの言葉に、私は大きな感動を覚えました。

“There is no wealth, but life.”

若い頃、遠縁にあたる寺で修行した経験のある私は、これを「富を求めるのは道を聞くためである」と訳し、以後、自らの

研究の支えとしています。私が長年研究生生活をしていたアメリカでは、当時既に「富を求めるのは、富を求めるためである」という風潮がありましたが、それだけでは人間は真に幸福にならないのではないのでしょうか。

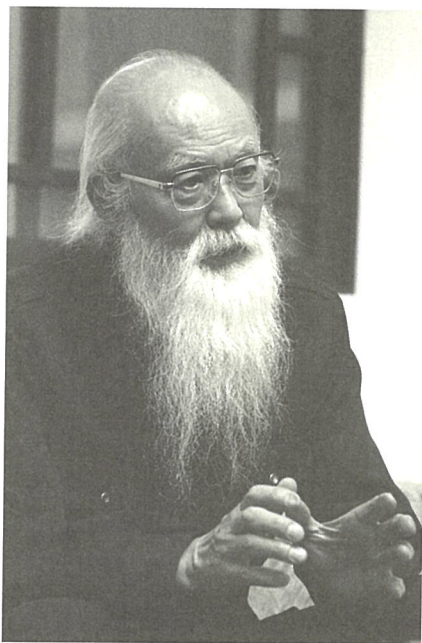
昭和天皇とヨハネ・パウロ二世から受けた 励ましを胸に

私が文化功労者に選ばれて宮中に招かれ、夢中になって自分の研究についてご説明していた時、昭和天皇が次のように言われたことは今でも強く心に残っています。

「君は、経済、経済というけど、人間の心が大事だと言いたいのだね」

ローマ法皇ヨハネ・パウロ二世からいただいた励ましも忘れることはできません。ローマ法皇が、世界が直面する最も重要な問題についてローマ教会の正式の考え方を全世界の司教に通達する文書を「回勅」といいますが、一八九一年にローマ法皇レオ十三世が出した回勅は「レールム・ノヴァルム」と呼ばれて、ローマ教会の重要な歴史的文書になっています。一九九一年はそれから百周年に当たるので、新しい「レールム・ノヴァルム」を出す作業に協力してほしいというお手紙を法皇からいただいたのです。

レオ十三世の「レールム・ノヴァルム」の副題は「資本主義の弊害と社会主義の幻想」でした。私は新しい「レールム・ノヴァルム」について、「社会主義の弊害と資本主義の幻想」と



いう主題を進言しました。これまで経済学がとってきた資本主義や社会主義という考え方では現代の問題は解決できず、二十世紀に向けて重要な概念は、ヴェブレンが唱えた制度主義である。そしてこの考え方を具現化した社会的共通資本の問題をさらに尊重し、個々の人間が自身の尊厳と魂の自立をはかれるような社会の構築こそが必要であることを強く提案したので

す。
その結果、私は直接ご進講する機会も与えられました。そこでいただいたおいしいワインも手伝って、私はこのようにヨハネ・パウロ二世に申しあげたのです。

「この世界の危機的状況のもとで、あなたは魂を救済する専門家として、もっと積極的に発言しなければいけません」
すると法皇は微笑みながらこう言われました。

「この部屋で私に説教したのは、あなたが最初です」

経済学では、人間の心を考えることは長らくタブー視されてきました。しかし、たとえば医療を考えてみてください。市民が必要とする保健・医療サービスを提供する時に重要なことは、医療施設や医師などの専門家、つまり「希少資源」をいかに有効に配置するかということです。そしてそのために、さまざまな制度的条件の整備が必要です。大切なのは、医療を経済に合わせるのではなく、経済を医療に合わせることに。官僚主導型ではなく、市民、国民の幸福を第一に考える経済。これが社会的共通資本の基本的な視点なのです。

「社会的共通資本」というと固い響きがあるかもしれませんが、私たちの経済的・精神的生活の基盤となるものです。この重要な資本を守り、生かしていく上で、皆さん一人ひとりにもできることがあります。それは「心」を大切に、素直に生きていくこと。論理とか儲けではなく、心を大事にして生きていくことが大切なのではないのでしょうか。長い歴史の中で匠の技が培われてきた京都では、さまざまな分野の職人さんに学ぶことも多いと思います。先ほどお話しした宮大工さんのように、人の心や生活を大切に仕事をしている方たちの話に素直に耳を傾けると、多くのものが得られると思います。そして、これは大学の原点でもあるのです。

これらのことを、とくに次代を担う若い人たちに理解していただきたいと思うと同時に、当センターでのプロジェクトもまた「社会的共通資本」として、研究の成果を皆さんと共有したいと願っています。

(談)